

1人1台端末を用いた「心の健康観察」に関する基礎的検討

春日 智 稀 (羽生市立羽生南小学校)

一色 翼 (川口短期大学こども学科)

会沢 信彦 (文教大学教育学部)

Preliminary Study on “Mental Health Monitoring” Using One Device for Each Student

KASUGA TOMOKI, ISSHIKI TASUKU, AIZAWA NOBUHIKO

(Hanyuminami Elementary School, Saitama)

(Department of Child Studies, Kawaguchi Junior College)

(Faculty of Education, Bunkyo University)

要 旨

本研究は、1人1台端末を用いた「心の健康観察」に関する基礎的知見を検討したものである。児童86名（第4学年38名、第6学年48名）を対象に心の健康観察を実施し、心の天気と体調及びhyper-QUの各項目（学校生活意欲尺度、学級満足度尺度、ソーシャルスキル尺度）との関連を測定した結果、一部の項目を除き低～中程度の相関が認められた。また、時期や学年を要因とする心の天気得点の平均値の差の検定の結果、いずれも有意な差はみられず、汎用性の高いツールであることがうかがわれた。さらに、実施後の自由記述についてKH Coderを用いた分析を行った結果、心の健康観察の実施は児童にとって自分の気持ちを内省する機会となり、教師にとって児童理解の契機となることが示唆された。

問題と目的

急増する不登校児童生徒数

近年、不登校児童生徒数が急増している。「令和5年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」（文部科学省, 2024a）によれば、小・中学校における不登校児童生徒数は346,482人（前年度299,048人）であり、11年連続で増加し、過去最多となった。さらに同調査では、不登校児童生徒のうち90日以上欠席した者は190,392人（55.0%）であることや、学校内外の機関等で専門的な相談・指導等を受けた不登校児童生徒の割合が全体の約6割に留まっていることも明らかになっている。こうした現状を踏まえ、今日の学校においては、すでに不登校状態にある児童生徒への個に応じた対応や、多職種連携を通じた「チーム学校」（中央教育審議会,

2015）による支援体制の実現のみならず、新たな不登校児童生徒を生まないための予防的取組にも目を向ける必要があると考えられる。

子どもの心の健康問題の早期発見・早期対応

そして、新たな不登校児童生徒を生まないためには、児童生徒が登校している段階で、その予兆を把握することが重要である。

子どもの発達科学研究所（2024）では、不登校児童生徒本人と保護者、及びその教師に対して、不登校に至る「きっかけ要因」を尋ねている。その結果、児童生徒や保護者の7割以上が「体調不良」、「不安・抑うつ」、「居眠り、朝起きられない、夜眠れない」といった心身不調・生活リズム不調を不登校のきっかけとして挙げている一方で、同じ項目に対する教師の回答割合は2割程度と低く、教師

側が子どもの変化に気付くことの難しさを示唆している。他にも一色・会沢（2024）は、子どもたちの問題行動等を把握するための現行アンケートには課題が散見され、回答者が不安や負担を感じることなく正直に回答しやすいように工夫されたり、早期発見に加え未然防止の視点を取り入れたりすることが必要であると主張している。また、1人1台端末を活用して子どもたちの心の状態を把握することは、問題行動等の未然防止に資する情報を得るのみならず、教師の自己理解を促進し、教師自身の取組や姿勢を見直す契機にもなると指摘している。

従来型の健康観察の現状と課題

こうした状況において、すべての子どもに対するスクリーニングとして重要性が高まっているのが、学校における健康観察である。

健康観察は、学校保健安全法第九条（保健指導）に位置付けられており、「日常的に子どもの健康状態を観察し、心身の健康問題を早期に発見して適切な対応を図ることによって、学校における教育活動を円滑に進めるために行われる重要な活動」であり、その機会は児童生徒が登校してから下校するまで、随時行うものとされている（文部科学省, 2009）。その中でも朝の健康観察については、子どもがその日一日を元気で過ごすのに適した健康状態であるかどうかを観察するために、全校で組織的かつ一斉に実施する必要がある（文部科学省, 2009）。このことと関連して、石山ら（2016）は、小学校における健康観察は、学級担任が児童を呼名し、健康状態を申告させる「健康状態申告式」で行われていることが多いと報告している。その理由として、教師が児童の心身の健康状態を把握することに加え、朝一番のやりとりが子どもとの関係性を築いたり、呼名することが子ども一人ひとりの存在を認めたりする機会にもなっていると主張している。

その一方で、現状の健康観察には課題があるとの指摘もある。例えば石井ら（2022）は、申告式で行われる健康観察について、「みんなの前で体調が悪いことを伝えにくい」、「クラスみんなに心配をかけたくない」などの理由により、体調が悪くても思わず元気と答えてしまう児童生徒が一定数存在すると主張している。また、健康観察の結果はデジタルデータとして集約されていないケースも散見され、それゆえに教職員間で共有がされにくいことも問題であると指摘されている（土井・加藤, 2022；杉坂ら, 2025）。

これらの現状を踏まえれば、従来の健康観察は、教師が児童生徒の心身の状況を把握するのみならず、児童生徒理解を促進する機会とされている一方で、児童生徒にとっては正直に申告できない場合があることや、DX化が進んでおらず教職員間における情報共有スピードが遅くなるなどの課題もあり、その実施方法には検討の余地が残されていると考えられる。

1人1台端末を用いた健康観察

こうした課題に対応し得る方法として、1人1台端末を用いた健康観察が注目されている。

文部科学省（2023a）は、「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策COCOLOプラン（以下、COCOLOプラン）」の中で、「1人1台端末を活用した心や体調の変化の早期発見」を位置付けた。実施方法としては、1人1台端末を用いてアプリケーションやフォーム上で児童自身が心や体調の状態について自己評価を行い、その結果を教師が確認する形式で行われる。COCOLOプランが示されて以降、1人1台端末を用いた健康観察の実践や検証が報告されるようになった。

例えば大阪府吹田市教育委員会（文部科学省, 2024b）は、小中学校における毎日の健

康観察をデジタル化し、児童生徒が各自の端末からその日の気持ちを回答したり、教師への相談希望の項目を設けたりするなどして、日々の児童生徒の心身の状況を把握するとともに、児童生徒が発するSOSを察知するという取組を行った。その結果、教職員の子どもに対する理解の幅が広がったことや、児童生徒が自身の健康状態について客観的にとらえることができるようになったことを報告している。他にも北海道深川市教育委員会（2024）では、小中学校に健康観察アプリを導入し、児童生徒がフェイススケール（顔マーク）による日々の気分の入力を行なった。その結果、子どもがアプリのコメント機能で不安を伝えることを契機として迅速な対応が可能になったことや、教師に直接話しにくい児童生徒にとっては有効であったことなどを報告している。

こうした実践が学校現場で広がりを見せるとともに、その効果が実証的にも検討されるようになってきた。例えば五十嵐（2025）は、小学生を対象に1人1台端末を用いた心の健康観察を導入し、5件法によるフェイススケールへの回答を求めた。結果として、タブレット端末には「簡便性」、「機密性」、「安心感」の良さがあることや、対面式の相談に抵抗のある児童が心のSOSを発信するきっかけとして有効であったこと、さらに回答状況をチーム支援に活用したことなどを報告している。また和久田ら（2021）は、小中学生を対象としたメンタルヘルス調査『こころの健康観察NiCoLi』を実施し、抑うつ・不安傾向との関連を検討した。結果として、中程度の抑うつ・不安傾向を示した児童生徒は全体の26.8%、深刻な抑うつ・不安傾向を示した児童生徒は全体の1.8%であったこと、さらに抑うつ・不安傾向は小学校1、2年生と中学生の女子において特に高い傾向がみられたことを報告している。さらに西村・和久田（2024）では、小学校と中学校に健康観察アプリを導入

し、平均不調項目数と平均欠席者数の推移及び抑うつ・不安症状との関連について検討した。結果として、不調項目数は全体的に中学校より小学校で多いことや、欠席者数は小学校より中学校で多くみられたこと、さらに日々の健康観察における不調項目数が多いほど抑うつ・不安症状が高く、欠席も多いという関連がみられたことを明らかにしている。他にも珍田ら（2024）による中学生を対象としたICTを用いた健康観察に関する調査によれば、従来の健康観察に比べ、ICT健康観察の方が「自分で自分の体調を把握しやすい」、心の状況についても「ICT健康観察の方が伝えやすい」という回答が多かったことや、ICT健康観察により「クラスみんなの前で体調が悪いことを知られたくない」という負担が軽減されたことを報告している。

こうした知見を統合すれば、1人1台端末を用いた健康観察は、児童生徒の心身の情報をデータ化することにより広範な利活用が可能となったり、児童生徒が心身の状態を表出しやすくなったりする効果があり、非常に有用な取組であるといえる。その一方で、朝の時間で行うことに負担があることや回答状況の確認に時間を要することなどが課題として挙げられており（北海道深川市教育委員会、2024）、その実施方法や分析範囲には検討の余地が残されているといえる。特に、収集した心の状態や体調などのデータをどのような項目と関連づけて分析するか、さらに多忙な教育現場においてどのように持続可能な形態で実施するかが重要であると推察される。

「心の健康観察」に関する基礎的知見の探索

以上のような現状より、1人1台端末を活用した健康観察は、児童生徒の心身不調やSOSを早期に発見することのみならず、教師が児童生徒理解を深めることや、コミュニケーションの契機となり得ることから、発達支持的及び課題予防的教育相談（文部科学省、

2022) ツールとしての活用可能性を有していると推察される。この点からも、1人1台端末を用いた健康観察に関する知見を深めることは、極めて大きな社会的意義があると言える。しかし、1人1台端末が配備されてからの期間が短いことや、行政主導による実施形態が多いことなどから、具体的な実践例やその検証結果についての知見は十分とは言い難い。

そこで本研究では、1人1台端末を用いた心の健康観察の基礎的知見を探索的に検討することを目的とする。具体的には、まず小学生児童に対して1人1台端末を用いた「心の健康観察」を行い、心の天気や体調などのデータを収集するとともに、児童に変化が認められた場合には組織的な教育相談を行う。次に、心の健康観察によって得られたデータとhyper-QU(河村, 2014)の各項目との関連を検討する。併せて、児童と教師による実施後の自由記述を分析する。

方法

調査対象者

埼玉県公立小学校1校を対象校とし、同校に在籍する第4学年2学級児童38名及び第6学年2学級児童48名を対象児童、対象児童を担任する教師4名及び主幹教諭、生徒指導担当教諭、教育相談コーディネーターを対象教師とした。

実施時期

2024年7月(休日を除く10日間)に第6学年児童48名に対して、さらに2024年9月(休日を除く19日間)に第4学年児童38名及び第6学年児童48名に対して、1人1台端末を用いた心の健康観察への回答を求めた。

その結果、回答状況に不備が確認されなかった第4学年児童37名および第6学年児童44名を分析対象とした。

質問項目

文部科学省(2023b)を参考に、以下の項目について尋ねた。

心の天気 回答入力時点における自身の心の天気について、晴れ、くもり、雨、かみなり、の4件法により尋ねた。分析に当たっては、晴れを4、くもりを3、雨を2、かみを1として変数に置き換えた。

体調 回答入力時点における自身の体調について、5:とてもよい、4:よい、3:ふつう、2:わるい、1:とてもわるい、の5件法より尋ねた。

運用方法

運用方法として、次の内容を設定した。①児童は、登校後～朝の会の間に入力を行う。②担任教師は、児童の入力後に集計画面を確認する。③体調が「1」の場合、心の天気が「かみなり」の場合、教師が個別の声かけまたは教育相談を行う。

その他の使用した尺度

心の天気との関連を検討するため、hyper-QU(河村, 2014)を用いた。

学校生活意欲尺度 児童の学校生活における意欲を把握することができる。下位尺度として、「友達関係」(3項目、 $\alpha=.91$)、「学習意欲」(3項目、 $\alpha=.66$)、「学級の雰囲気」(3項目、 $\alpha=.82$)がある。

学級満足度尺度 学級内で友人等から承認されているか否かと関連する承認得点(6項目、 $\alpha=.85$)と、学級内におけるいじめ・冷やかしの被害を受けているか否かと関連する被侵害得点(6項目、 $\alpha=.79$)の二つの尺度得点により、児童の学級への満足度を測定するものである。

ソーシャルスキル尺度 友人との関係性に配慮する配慮スキル得点(8項目、 $\alpha=.87$)と、友人と積極的にかかわろうとするかかわりスキル得点(8項目、 $\alpha=.84$)から、児童

の対人関係を営むためのスキルを把握することができる。

統計ソフト

データ分析にはHAD18.0（清水, 2016）及びKH Coder3.Beta.03i（樋口, 2004）を用いた。

倫理的配慮

対象校の学校長及び対象教師、対象児童の保護者に研究の趣旨を口頭及び文書にて説明し了解を得た。さらに児童に対しては、心の健康観察への回答は任意であることや成績には全く関係が無いこと、回答の状況は複数の教師で共有することを口頭により説明した。

結果

変数間の相関の検討

第6学年対象児童のデータを用いて、心の天気と他の変数間の相関係数を算出した結果（表1）、体調、学校生活意欲尺度の「友達関係」、「学級の雰囲気」、学級満足度尺度の

「承認」、ソーシャルスキル尺度の「配慮」、「かかわり」といずれも有意な正の相関が示された（.272～.437）。一方、学級満足度尺度の「被侵害」とは有意傾向の負の相関が示された（-.216）。

時期による心の天気得点の差の検定

実施時期による平均得点に有意差があるかを検討するために、第6学年対象児童の心の天気平均得点を用いて t 検定を行った。その結果、時期による心の天気の平均得点に有意な差は見られなかった（表2）。

学年による心の天気得点の差の検定

次に、学年による平均得点に有意差があるかを検討するために、第4学年対象児童及び第6学年対象児童の心の天気平均得点を用いて t 検定を行った。その結果、学年による心の天気の平均得点に有意な差は見られなかった（表3）。

表1 心の天気と他の得点間の相関係数

体調	hyper-QU							
	学校生活意欲尺度			学級満足度尺度		ソーシャルスキル尺度		
	友達関係	学習意欲	学級の雰囲気	承認	被侵害	配慮	かかわり	
心の天気 (6年 $n=44$)	.437**	.404**	.169	.355**	.305**	-.216 ⁺	.272*	.357**

** $p < .01$, * $p < .05$, ⁺ $p < .10$

表2 時期による心の天気平均値の t 検定結果

	7月	9月	t 値	df	d	
	M (SD)	M (SD)				
心の天気 (6年 $n=44$)	3.569 0.510	3.661 0.438	1.027	<i>n.s.</i>	43.000	.193

表3 学年による心の天気平均値の t 検定結果

	4年 ($n=37$)	6年 ($n=44$)	t 値	df	d	
	M (SD)	M (SD)				
心の天気	3.613 0.527	3.661 0.438	0.440	<i>n.s.</i>	70.128	.099

対象児童による自由記述の語の抽出と頻出語の確認

第4学年及び第6学年児童より得られた合計52文の自由記述について、KH Coder（樋口, 2004）を用いて分析を行った。前処理を実行し、文章の単純集計を行った結果、総抽出語数は473、異なり語数は143であった。これらの頻出語のうち、出現頻度2までの語を表4に示す。

表4 児童自由記述による頻出語（出現回数順）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
気持ち	14	言える	3
自分	14	朝	3
心	12	毎日	3
思う	9	今	2
健康	5	質問	2
気分	4	状況	2
相談	4	素直	2
伝える	4	良い	2
観察	3		

対象教師による自由記述の語の抽出と頻出語の確認

対象児童同様の手順で、対象教師より得られた合計31文の自由記述の分析を行った。総抽出語数は598、異なり語数は199であった。これらの頻出語のうち、出現頻度2までの語を表5に示す。

表5 教師自由記述による頻出語（出現回数順）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	14	可能	2
回答	7	教師	2
確認	5	見る	2
感じる	4	言う	2
時間	4	行う	2
タブレット	3	自分	2
児童	3	少し	2
朝	3	声	2
内容	3	相談	2
難しい	3	分かる	2
様子	3	忙しい	2
ツール	2	立場	2
トラブル	2	話す	2
雨	2		

対象児童による自由記述の共起関係の探索

次に、KH Coderを用いて、第4学年と第6学年対象児童の自由記述について、学年を分けて共起ネットワーク図の描画を行った。第4学年の結果を図1に、第6学年の結果を図2にそれぞれ示す。共起ネットワーク図とは、テキストデータ内において出現頻度の高い語のうち、出現パターンの類似した語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだネットワーク図である（福井・阿部, 2013）。一色・会沢（2024）に分析のおおよその手順を倣い、関連性の強さを示す共起関係の算出にはJaccard係数を用い、抽出語の最小出現回数を2回、描画する共起関係の絞り込みを描画数60と設定した。さらに、強い共起関係ほど太い線で、出現数の多い語ほど大きいバブルプロットで描画されるようにし、サブグラフの検出を行った。

サブグラフ検出の結果、第4学年においては、2つのサブグラフが抽出された（サブグラフごとに囲んだ楕円点線は、筆者が加筆した）。具体的には、「心」や「健康」を中心としたグループ、「思う」、「言える」の2語より構成されるグループであった。

次に第6学年では、4つのサブグラフが抽出された。具体的には、「朝」と「気分」の2語から構成されるグループ、「自分」や「気持ち」を中心としたグループ、「いや」、「天気」、「悪い」の3語から構成されるグループ、「タブレット」、「取る」、「行く」の3語から構成されるグループであった。

対象教師による自由記述の共起関係の探索

対象児童と同様の手順と設定で、対象教師による自由記述について共起ネットワーク図の描画を行った（図3）。

サブグラフ検出の結果、5つのサブグラフが抽出された。具体的には、「立場」と「相談」の2語から構成されるグループ、「タブレット」、「内容」、「トラブル」などの語から

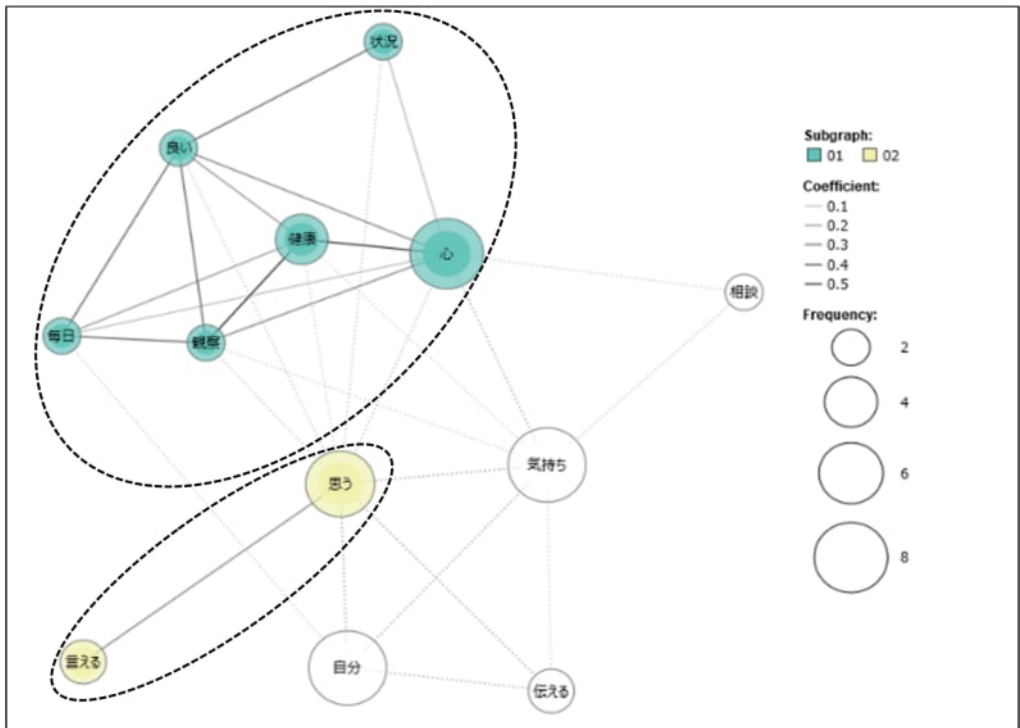


図1 自由記述の共起ネットワーク図（第4学年対象児童）

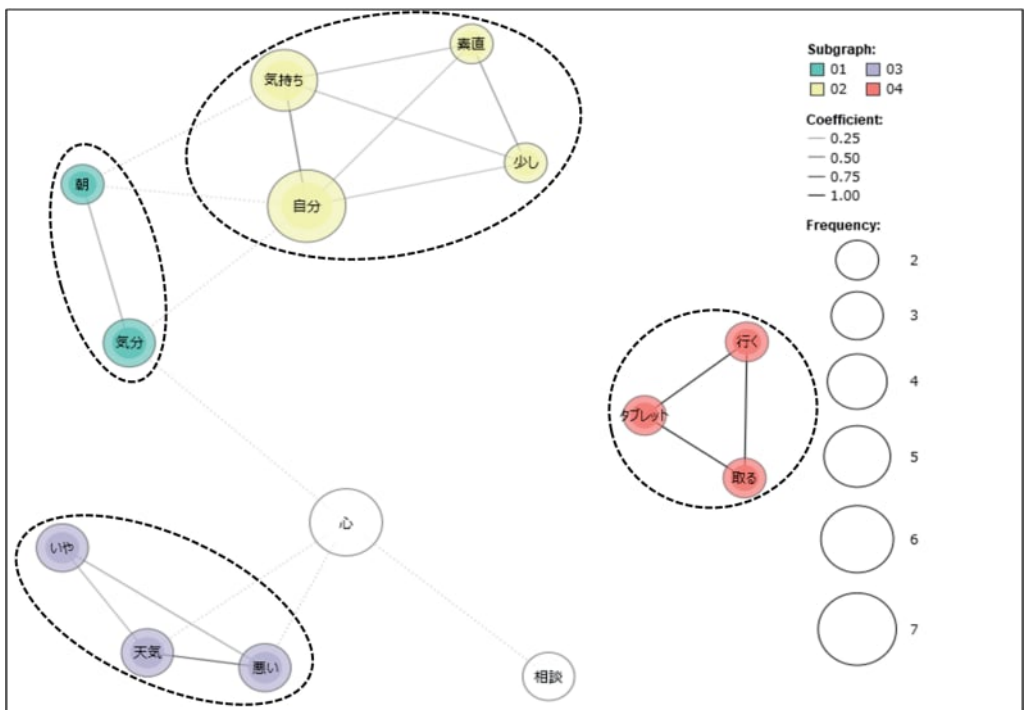


図2 自由記述の共起ネットワーク図（第6学年対象児童）

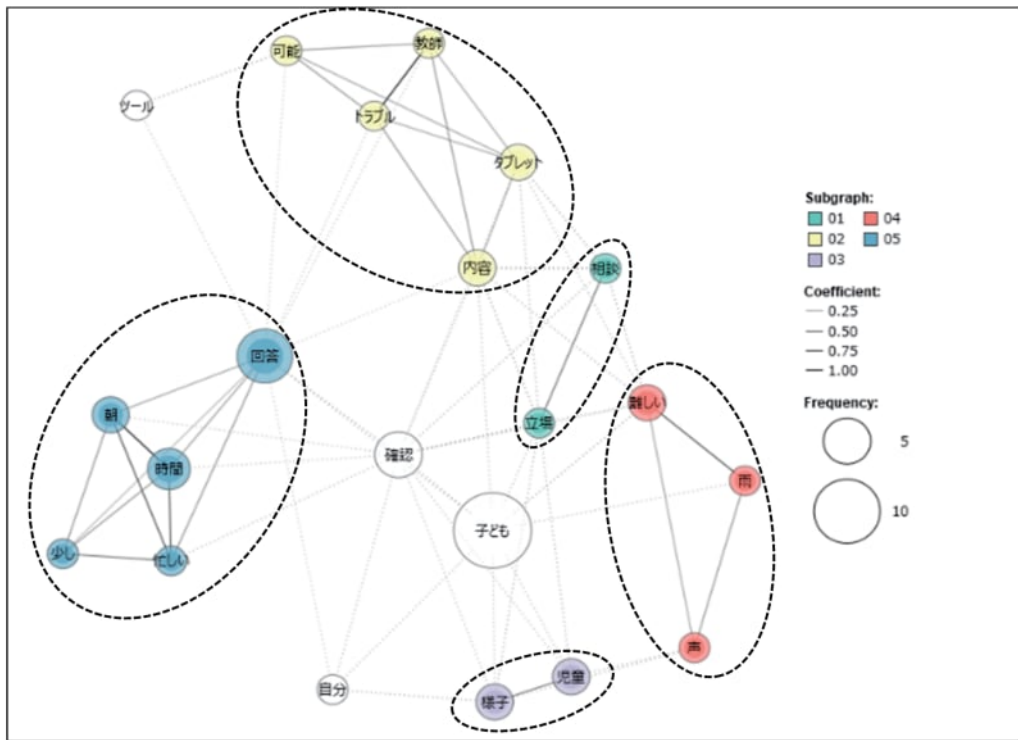


図3 自由記述の共起ネットワーク図 (対象教師)

構成されるグループ、「児童」、「様子」の2語から構成されるグループ、「難しい」、「雨」、「声」の3語から構成されるグループ、「回答」、「時間」、「朝」などから構成されるグループであった。

考察

変数間の相関の検討

本研究の目的は、1人1台端末を用いた心の健康観察の基礎的知見を探索的に検討することであった。

はじめに、心の天気と他の得点間の相関について検討した。有意な正の相関が示されたのは、体調、学校生活意欲尺度の「友達関係」、「学級の雰囲気」、学級満足度尺度の「承認」、ソーシャルスキル尺度の「配慮」、「かわり」であり (.272~.437)、学級満足度尺度の「被侵害」とは有意傾向の負の相関が示された (-.216)。

体調との関連については、「心とからだはつながっている」という従来の知見をより支持するものであり、小学生の生活習慣が心の健康に影響を与えることを明らかにした加藤ら (2014) の知見とも合致する。換言すれば、体調の良し悪しは心の健康のバロメーターであると考えられる。従って、本ツールを用いて体調と心の健康の両面より児童を総合的にアセスメントすることは、学校不適応の未然防止策として有効な方法であるといえよう。

学校生活意欲尺度については、「友達関係」と「学級の雰囲気」において有意な正の相関が示された。「友達関係」はクラスメイトと親和的な関係を築くことへの意欲を、「学習意欲」は学習を通して自分を発揮することへの意欲を、「学級の雰囲気」はクラスで活動することを肯定的にとらえているかどうかを表していることを踏まえると、友人との交友関係や学級の状態は、児童の心の健康と深く

関連しているといえよう。一方で、「学習意欲」とは有意な相関は確認されなかった。「学習意欲」が学習を通して自分を発揮することへの意欲を表していることを踏まえれば、心の健康状態が必ずしも直接的に学習への主体的な関わりや達成志向と結びつくわけではない可能性が示唆される。すなわち、児童が心理的に安定していても、学習そのものへの関心や意欲が高いとは限らず、学習意欲の形成には学習内容そのものへの興味・関心など、他の要因が影響していることが考えられる。ただし、不登校に至った要因の中には「学業不振」も報告されており（文部科学省, 2024a；子どもの発達科学研究所, 2024）、学習への取組状況にも注視する必要がある。それゆえ、児童の心の健康を支えるうえでは、友人関係や学級の雰囲気といった日常的な対人環境の充実に加えて、学習における内発的動機づけを高めるような教育的支援も併せて検討する必要があるだろう。

学級満足度尺度については、「承認」とは有意な正の相関が、「被侵害」とは有意な負の相関が示された。「承認」は子どもたちの存在や行動が級友や教師から承認されているか否かを示し、「被侵害」は不適応感やいじめ・冷やかしなどを受けているかどうかを示しており（河村, 2006）、児童の学級満足度を2つの軸から測定できるものである。これらの2項目と有意な相関が示されたことを踏まえれば、本ツールを用いることにより、より簡便かつ即時に児童の学級適応の状態を把握することができる可能性があると考えられる。

最後にソーシャルスキル尺度については、「配慮」と「かかわり」の両者において有意な正の相関が示された。この尺度は、対人関係のマナーやルールへの定着具合を、スキルという行動の側面から測るものであり（河村, 2006）、親和的学級ではソーシャルスキル得点が高いことが明らかになっている（武蔵・河村, 2015）。他にも、小学校の学級全体にソ

シャルスキルトレーニングを実施したことにより学校適応感が向上したことを明らかにした大対・松見（2010）や、学習・行動面で著しい困難を有する児童に対して個別のソーシャルスキルトレーニングを実施したことにより不適応行動の改善があったことを明らかにした有本・小泉（2019）の知見も踏まえれば、児童の対人関係スキルを育むことは良好な学級適応を促進する効果があると考えられ、結果的に心の健康に安定をもたらすことが推察される。すなわち、本ツールを用いて児童の心の健康を把握することにより、個人のみならず学級集団全体の成熟度を検討することが可能になると考えられる。

心の天気得点の差

次に、時期および学年による心の天気得点の差に有意差があるかを検討するために、それぞれ t 検定を行った。その結果、時期や学年による有意差は確認されなかった。それゆえ、時期や学年に左右されず、いつでもどの子どもに対しても適用することができる心の天気は、非常に汎用性の高いツールであると捉えることもできる。ただし、1学期に比べて2、3学期の方が児童のストレスが高まりやすく（谷口, 2013）、低・中・高学年でストレスの様態が異なるといった先行研究も確認される（古守・大井, 2008）。それゆえ、小学4年生と6年生に限られた人数が対象であった本研究の知見を一般化し過ぎることなく、調査時期や調査対象の範囲を広げてより詳細な検討を重ねる必要もある。

対象児童による自由記述

児童から得られた心の健康観察実施後の自由記述について、KH Coder（樋口, 2004）を用いて分析を行った。自由記述の中で最も出現回数が多かった語は「気持ち」と「自分」で、次に多かったのは「心」だった。「先生がみんなの気持ちを分かるから、心の健康観

察をやってよかった」や「自分の気持ちを考えたことがなかったけれど、気持ちと向き合えた」などの記述が複数確認されたことから、心の健康観察は児童にとって好意的に受け止められていることがうかがえる。さらに、「相談」や「伝える」、「言える」などの語も複数回出現していることから、中学生において確認された「自分で自分の体調を把握しやすく、心の状況についても伝えやすい」という珍田ら（2024）の知見は、小学生においても当てはまる可能性が示唆された。

次に、サブグラフ検出の結果について、学年ごとに検討した。

まず第4学年では、自由記述は2つに大別される可能性があることが示された。

1つ目は「心」という語を中心としたグループであり、「健康」や「良い」という語が共起していることから、心の健康観察を肯定的に評価している児童が一定数存在することがわかる。

2つ目は、「思う」、「言える」の2語から構成されるグループであった。「思っていることを言える」、「相談ができるからとても気持ちが楽になった」といった実際の記述がみられたことから、心の健康観察が有する教育相談的な機能を児童が肯定的に評価していることがうかがえる。

次に第6学年では、自由記述は4つに大別される可能性があることが示された。

1つ目は「朝」、「気分」の2語から構成されるグループであった。本研究では、入力するタイミングを登校直後に設定しており、「朝の気分が書けて良かった」という実際の記述があったことも踏まえると、従来の健康観察と同様のタイミングで入力を行うという実施方式は、児童にとって受け入れやすいものであったことが推察される。

2つ目は「自分」という語を中心としたグループであり、「気持ち」、「素直」などの語とつながりがみられた。「先生に直接言わな

くてもいい」という実際の記述があったことを踏まえると、「回答者が不安や負担を感じることなく正直に回答しやすいような工夫が必要である」（一色・会沢、2024）との指摘に応え得るツールであることが示されたと考えられる。

3つ目は、「いや」、「天気」、「悪い」という3語から構成されるグループであり、質問項目のうち、心の天気に対する評価であると考えられる。「体の調子が悪いと心の天気も悪くなる」という実際の記述を踏まれば、心の健康観察は児童にとって、内省を促すことにより心とからだのつながりを実感したり、内面的な機微を捉えやすくなったりする効果があったことが考えられる。

4つ目は、「タブレット」、「取る」、「行く」という3語から構成されるグループで、他のグループや語とのつながりはなかった。実際の記述には、「毎日答えるのが面倒」、「時間がなかった」という内容もみられた。本研究の対象校では、毎朝端末を別室へ取りに行く必要があったため、このことに負担を感じている児童が一定数存在することが推察された。朝の時間帯に効率的に、かつ児童が負担なく取り組むことのできる方式をさらに検討する必要があるといえる。

こうした一連の児童の記述から、本研究における心の健康観察は児童にとって、質問項目そのものに対しては肯定的な評価が多く、さらに自身の気持ちを内省する契機となることが示唆された。一方で、朝の忙しい時間帯に実施することに対する負担を感じている児童が一定数存在することも明らかになった。

対象教師による自由記述

対象児童と同様に、対象教師から得られた心の健康観察実施後の自由記述について分析を行った。自由記述の中で最も出現回数が多かった語は「子ども」で、次に多かったのは「確認」だった。また、「相談」、「分かる」、

「話す」などといった本来の趣旨に沿った語が抽出された一方で、「時間」、「朝」、「難しい」といった負担を表すと思われる語も3～4回出現していた。

次に、サブグラフ検出の結果について検討した。

対象教師から得られた自由記述は、大きく5つのサブグラフに大別される可能性があることが示された。

1つ目は、「相談」、「立場」の2語から構成されるグループで、「相談」においては「タブレット」という語とのつながりが確認された。「児童全体を見守る立場として、すべての子どもの様子を確かめるのはとてもよいと思う」という実際の記述からは、健康観察による情報を速やかに把握できるという点において、学校全体の児童を見守る立場の教師も有用性を感じていることが示された。これは、従来の健康観察において指摘されていた「教職員全体の共有が遅くなってしまふ」（土井・加藤, 2022）という課題に対応するだけでなく、担任とは立場の異なる教師も健康観察データを利活用することができるという活用可能性を示した結果と考えられる。

2つ目は、「タブレット」、「教師」、「トラブル」などから構成されるグループであった。本取組にあたり、どうしても教師の目が届かない場合に対する懸念だと考えられる。「教師がいないところで回答させるのは不安だった」という実際の記述からも、1人1台端末を用いた健康観察を行う場合には、人的にも物理的にも十分な体制を整える必要があることが示唆された。

3つ目は、「児童」、「様子」の2語から構成されるグループで、回答内容に応じて児童に対して声をかけるなど、心の健康観察を契機として教師の行動変容が生じた可能性が考えられる。また、「子どもと話すことが多くなった」、「児童理解につながった」などの実際の記述からは、従来の健康観察が有してい

た「児童理解の機会」（石山ら, 2016）としての機能は、1人1台端末を用いた健康観察においても働き得る可能性が示唆された。

4つ目は、「雨」、「声」、「難しい」の3語から構成されるグループで、回答状況をどのように指導に生かすかについて難しさを感じている教師の姿が想起される。結果を教師がどう受け止め、どのように声をかけるかについてはさらなる検討が求められる結果となった。さらに、教師が指導・支援で難しさを感じている児童は、サブフェイス（フェイススケール）の選択と幸せ得点の入力状況が一致しないことを明らかにした八並（2023）の知見を踏まえれば、個々の児童の申告状況のみではなく、その他の児童を取り巻く状況を教師が包括的に捉えてアセスメントすることが重要であるといえよう。

5つ目は、「回答」を中心とするグループであり、「朝」、「時間」、「忙しい」などの語が共起していた。朝の忙しい時間帯に心の健康観察を実施することに教師が負担を感じていることが推察される結果であった。既存の日課の中でどのように持続可能な方法で実施するかについてはさらなる検討が求められる。

こうした一連の教師の記述から、本研究における心の健康観察は教師にとって、従来の健康観察や日常的なコミュニケーションでは把握しきれない児童の内面にふれることで、より多面的な児童理解を促進する効果があったことや、回答を確認することが教師の行動を変容させる契機となる可能性があることが示された。一方で、個々の児童に応じた心の天気解釈とそれを活用した指導方針に対する迷いや、端末を用いることによって生じるトラブルについての懸念、さらには多忙な教育現場における効率的な実施方法などについて、広範にわたる検討が必要であることも示された。

本研究の限界と展望

本研究の限界点として、第一に、限られた学年のみを対象としている点が挙げられる。第4学年と第6学年のみに調査を行ったため、低学年や異校種の児童生徒に範囲を広げた検討が必要である。第二に、汎化に向けた課題である。特に低学年児童への実施を検討する場合には、ローマ字の入力が未習であることから、自分の内面を言語化して入力することに大きな課題が残る。それゆえ、例えば低学年においてはイラスト表示を選択させる回答方式にするなど、学年に応じたインターフェースを検討する必要がある。

謝辞

本研究の実施にあたり、調査に御協力くださった校長先生をはじめ小学校教師の皆様ならびに児童の皆様、心から感謝申し上げます。心の健康観察実施に際しては、埼玉県立総合教育センター指導主事 小野宏夢氏に貴重な御助言を賜りました。記してお礼申し上げます。

引用文献

有本美佳子・小泉令三 (2019). 小学生の不
適応行動改善及び社会的能力育成の試
み—社会性と情動の学習におけるSSTの
個別指導と全体指導の組み合わせを用い
て— 福岡教育大学大学院教育学研究科
教職実践専攻(教職大学院)年報, 9,
15-22.
珍田洋子・小林央美・相馬優樹・本間史洋
(2024). ICTを活用した健康観察の成果
と課題 第2報—中学生を対象とした意
識調査の結果から— 弘前大学教育学部
紀要, 131, 189-197.
中央教育審議会 (2015). チームとしての学
校の在り方と今後の改善方策について
(答申) Retrieved from [https://www.mext.
go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/)

[toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/02/05/1365657_00.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/02/05/1365657_00.pdf) (2025年
6月17日)

土井梨沙子・加藤直樹 (2022). 子どもの心
身のサインに気づくための健康観察支援
システムの提案と開発 研究報告コンピ
ュータと教育 (CE), 2022(24), 1-8.

福井美弥・阿部浩和 (2013). 異なる文体に
おける共起ネットワーク図の図的解釈
図学研究, 47(4), 3-9.

樋口耕一 (2004). テキスト型データの計量
的分析—2つのアプローチの峻別と統
合— 理論と方法 数理社会学会, 19(1),
101-115.

北海道深川市教育委員会 (2024). 令和6年
度1人1台端末を活用した「心の健康観
察」の導入に向けた調査研究事業
Retrieved from [https://www.dokyo.pref.
hokkaido.lg.jp/fs/1/1/3/0/9/2/5/9/_/01-
1_【深川市】成果普及資料.pdf](https://www.dokyo.pref.hokkaido.lg.jp/fs/1/1/3/0/9/2/5/9/_/01-1_【深川市】成果普及資料.pdf) (2025年
6月17日)

五十嵐磨由子 (2025). 心の問題を早期発見
し対応につなげる手立ての研究—タブレ
ット端末を利用した心の健康観察とチ
ーム支援体制構築を通して— 教育実践研
究(上越教育大学学校教育養成・研修高
度化センター), 35, 223-228.

石井有美子・奥田紀久子・田中祐子・西岡伸
紀 (2022). 小中学生における朝の健康
観察の日常生活への活用—恩恵, 負担,
ソーシャルサポート, ヘルスリテラシー
との関連性— 学校保健研究, 64(3),
235-247.

石山志央子・小林央美・新谷ますみ (2016).
学級担任が行う健康観察に関する実態
調査 弘前大学教育学部紀要, 116(2),
31-38.

一色翼・会沢信彦 (2024). タブレット端末
を用いた問題行動等未然防止アプリに關
する予備的検討 文教大学教育学部紀要,

- 58, 121-131.
- 加藤和代・大平曜子・国土将平 (2014). 小学生の生活習慣と心の健康との因果構造発育発達研究, 2014(63), 6-17.
- 河村茂雄 (2006). 学級づくりのためのQ-U入門「楽しい学校生活を送るためのアンケート」活用ガイド 図書文化
- 河村茂雄 (2014). よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート hyper-QU 図書文化
- 子どもの発達科学研究所 (2024). 文部科学省委託事業 不登校の要因分析に関する調査研究 報告書 Retrieved from https://kohatsu.org/pdf/futoukouyouin_202502_a7.pdf (2025年6月17日)
- 古守雪絵・大井修三 (2008). 小学生のストレスに関する研究：小学生における日常ストレスと友だちストレス対処行動の分析 岐阜大学教育学部研究報告, 人文科学, 56(2), 145-157.
- 文部科学省 (2009). 教職員のための子どもの健康観察の方法と問題への対応 Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20240322-mxt_kenshoku-000031772_1.pdf (2025年6月17日)
- 文部科学省 (2022). 生徒指導提要 (改訂版) Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20230220-mxt_jidou01-000024699-201-1.pdf (2025年6月17日)
- 文部科学省 (2023a). 誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策 COCOLOプラン Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20230418-mxt_jidou02-000028870-cc.pdf (2025年6月17日)
- 文部科学省 (2023b). 健康観察・教育相談アンケート作成マニュアル Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20250303-mxt_jidou02-00004070_005-1.pdf (2025年6月16日)
- 文部科学省 (2024a). 令和5年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果 Retrieved from https://www.mext.go.jp/content/20241031-mxt_jidou02-100002753_1_2.pdf (2025年6月16日)
- 文部科学省 (2024b). 1人1台端末等を活用した「心の健康観察」について Retrieved from https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/19f3feb3-912a-4741-9bd9-7f523d28e971/c581e17b/20240808_councilsA_kodomonjaisatsutaisaku-kaigi_19f3feb3_07.pdf (2025年6月17日)
- 武蔵由佳・河村茂雄 (2015). 小学校における学級集団の状態像と児童の学級生活意欲およびソーシャルスキルとの関連 学級経営心理学研究, 4, 29-37.
- 西村倫子・和久田学 (2024). 学校ベースのメンタルヘルススクリーニングと健康観察データの利活用 子どものこころと脳の発達, 15(1), 54-62.
- 大対香奈子・松見淳子 (2010). 小学生に対する学級単位の社会的スキル訓練が社会的スキル, 仲間からの受容, 主観的学校適応感に及ぼす効果 行動療法研究, 36(1), 43-55.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 杉坂くるみ・高谷里依子・土屋綾子・森重比奈・野村純 (2025). 保健室 DX の現状調査 (1) 一学校で収集する健康情報のデジタル化の現状— 千葉大学教育学部研究紀要, 73, 83-88.
- 谷口弘一 (2013). 小学生の学校および家庭生活ストレスに関する縦断的研究 教育実践総合センター紀要 (長崎大学), 12, 81-85.

- 和久田学・西村倫子・足立匡基・大須賀優子・河合優年 (2021). 教育委員会との連携による全児童生徒を対象としたこころの健康調査からわかること—コロナ禍における子どものこころ, その状況と対応— 日本教育心理学会第63回総会発表論文集, 100-101.
- 八並光俊 (2023). 情動把握アプリを用いた小学生の情動に関するケーススタディ 東京理科大学教養教育研究院紀要 創刊号, 1, 148-163.